

仏道を学ぶ人は後日を待って仏道修行をしようと思っではならない。
ただ今日、ただ今をとりにながさずに

その日その日その時その時に努力すべきである。

(正法眼蔵随聞記 一・六 学道の人には後日を待って行道せんと思ふ事なかれ p32)

仏道を得るということは、生まれつきのするどいとか鈍いとかによるのではない。だれでもめいめい法を悟ることができるのである。

ただひたすらに努力してやまないか、なまけているかによって、道を得るのに速い、おそいがある。またその努力するか、なまけるかの違いは、志が徹底するかしないかにかかるものである。

志が徹底しないのは、無常ということをよく考えないからである。

われわれのからだは刻々に片はしから死んでいつている。

どこまでいっても少しの間も一定な状態を保ってはいない。

生きているわずかの間に、時をむなくすごしてはならない。

(正法眼蔵随聞記 一・七 海中に龍門と云ふ処あり p38)

どの仏もどの祖師も、皆もとは凡夫であった。

そして凡夫のときには必ず悪い行いもあり、悪い心もあった。にぶくもあり、ばかでもあった。しかし、皆それを改めて、指導者に従い、仏の教えと仏の行いによって修行したので、仏となり祖となったのである。

現今の人もそうでなくてはならない。

自分にはばかだから、鈍いからといって卑下してはならない。

この世で発心しなければ、どんな時を待って発心することがあろう。

他に心に移さずにいると、必ず道を得ることができるのである。

われわれの生命は刻々に流れゆいて少しもとどまらず、物事は日々うつりかわって、一定の状態なく、変化することのすみやかなことは、だれでも目の前に見ている道理である。指導者や經典の教えを待つまでもない。

一刻一刻に、明日のあることをあてにしてはならない。

その日、その時だけ生きているものと考えて、このあとどうなることかはきまったものではない。

先のことはわからないから、ただ、きょうだけでも、命のある間、仏道にしたがおうと思うべきである。

その仏道にしたがうということは、仏法を興し、生あるものに利益を与えるため、身を捨て、命を捨ててさまざまの事を行なっていくのである。

(正法眼蔵随聞記 二一七 今の世出世間の人 p149)

古人は多く、「光陰をむだに過ごしてはならない」と言っている。

あるいは、「時光をなすことなく過ごしてはならない」と言っている。

仏道を学ぶ者は、必ずわずかの時間も惜しまなくてはならない。

露のようにはない命は消えやすい、時はいち早く移ってゆく。

生きているわずかな間に、ほかのことにかかわらず、ただ仏道を学ぶべきである。

世間の人は、結局、自分を助けてくれることはない。

力がないといって、修行しなかったら、いつになったら仏道を得ることができようか。

未来永劫そのときはない。

ただ、必ず万事をなげすてて、ひたすらに仏道を学ぶべきである。

いずれ後にと考えてはならない。

(正法眼蔵随聞記 六一九 古人多くは云く光陰虚しく度る事なかれ p357)